

まついやすゆき
戦国武将 松井康之の軌跡

■八代松井家の礎を築いた松井康之



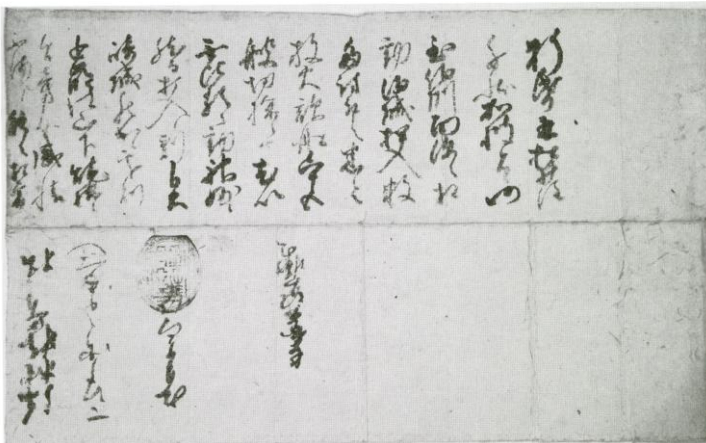
江戸時代を通して大名細川家の筆頭家老をつとめ、正保3年（1646）から明治3年（1870）まで八代城をあずかった松井家は、康之（1550～1612）を始祖とする。康之は、もともと將軍足利義輝^{よしてる きんじゆう}の近習^{きんじゆう}であったが、永禄8年（1565）に義輝が暗殺されると、細川藤孝^{ふじたか}に仕えるようになった。織田信長に従った藤孝は、天正8年（1580）に丹後一国の支配を認められる。これにともない、康之は、丹後国内に1万3千石の知行地を与えられるとともに、細川家の家老に定められた。さらに、本能寺の変後の天正10年10月、7千石を加増され、丹後久美城（現京都府京丹后市久美浜町）を預けられた。

ところで、康之は、鳥取城攻め（天正9・1581年）、小牧・長久手の戦い（天正12・1584年）など、信長・秀吉の天下統一戦争に従軍している。その働きは秀吉から高く評価され、知行地や位階を与えられるなど、大名家の家臣としては破格の扱いを受けた。

関ヶ原合戦後の慶長5年（1600）11月、細川家は丹後から豊前・豊後（国東郡・速見郡^{くにしき はやみ}）へ国替になる。これにともない、康之は、豊後木付城（現大分県杵築市）2万5千石あまりを与えられ、九州の地に移り住むことになった。

慶長17年（1612）1月23日、康之は豊前小倉（現福岡県北九州市）で63年の生涯を閉じる。康之が八代に来ることはなかったが、彼が獲得した筆頭家老にして城主格という家柄は、のちに松井家が八代城をあずかる強力な根拠となった。

6（天正9・1581年）9月16日 織田信長黒印状 細川藤孝宛 永青文庫所蔵



天正9年（1581）、松井康之は羽柴秀吉の因幡鳥取城攻めを支援すべく、丹後水軍を率いて出軍。因幡・伯耆^{ほうぎ}方面（現鳥取県）で、敵船を撃破するなどの活躍をみせた。本状は、因幡・伯耆での康之の働きを知った織田信長が、康之の主君である細川藤孝に送ったもの。書中には、「伯耆の泊城に押し入り、敵を数多く討ち取り、ことごとく放火し、敵船65艘を切り捨てたということ、比類なき働きである」と記されている。

7 (天正 10・1582 年) 7 月 11 日 羽柴秀吉書状 細川忠興宛 永青文庫所蔵



本能寺の変後、羽柴秀吉は明智光秀に与しなかった細川藤孝・忠興父子に対し、丹後一国の領有と加増を保証した。本状はそのときに発給されたもの。注目すべきは、文末の記述。「松井康之が《人数》を維持できるよう、加増分の三分の一を与えるように」と記されている。この「人数」とは、具体的には丹後水軍を指すものと考えられる。すなわち、秀吉は、丹後水軍拡充のため、康之の加増を指示したのであり、秀吉が康之率いる丹後水軍の存在を重視していたことがわかる。

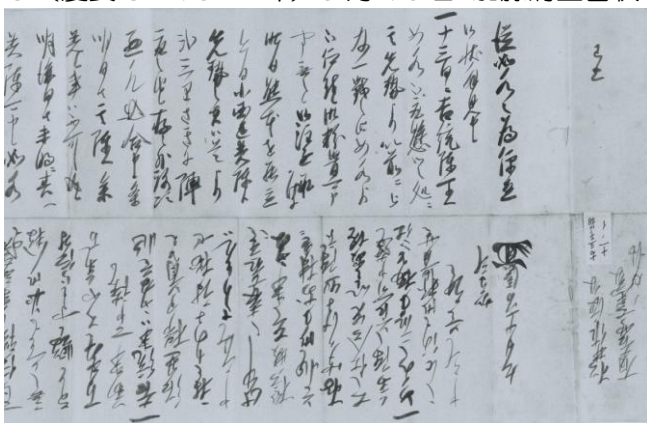
8 天正 15 年 (1587) 12 月 19 日 松井康之知行宛行状 竹田藤松宛 八代市立博物館所蔵



ちぎょうあてがいじょう

天正 10 年 (1582) 10 月、松井康之は細川藤孝から丹後久美 (現京都府京丹後市久美浜町) に新城を築くことを許されるとともに、その周辺地域に 2 万石の知行地を与えられた。これにより康之は、多くの家臣を召し抱えることができるようになった。本状は康之が家臣竹田藤松に与えたもので、貳ヶ村 (現京丹後市峰山町二箇) の内 75 石、市場村 (現京丹後市久美浜町市場) の内 50 石、都合 125 石を与える旨が記されている。藤松の母は、康之の妻自得院の姉にあたり、それが縁で康之に仕えるようになったという。

9 (慶長 5・1600 年) 9 月 16 日 加藤清正書状 松井康之・有吉立行宛 松井文庫所蔵



慶長 5 年 (1600) の関ヶ原合戦時、松井康之は細川忠興の飛地である豊後木付城 (現大分県杵築市) を守っていた。木付城は石田三成に味方する大友義統 (旧豊後国主) 軍の攻撃を受けたが、康之率いる木付城守備隊は必死に防戦し、城を守り抜いた。本状は、大友軍襲来の知らせを受けた熊本城主加藤清正が、木付城の康之らに送ったもの。書中には、「大友軍と一戦に及んだとのこと。御

粉骨に言葉もありません。」と記されており、康之の奮戦ぶりをうかがうことができる。なお、康之と清正はともに家康方として同盟関係にあった。

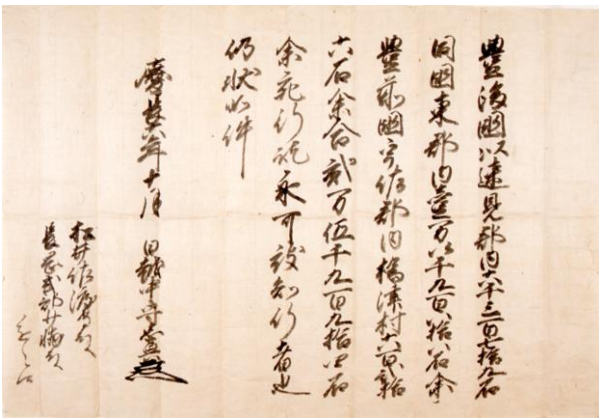
10 (慶長6・1601年) 7月4日 松井康之回状 松井家臣 11名宛 松井文庫所蔵



関ヶ原合戦の翌年、細川忠興は豊後木付（現大分県杵築市）で手柄のあった松井家臣を豊前中津城（現大分県中津市）に召し出し、その軍功を賞した。本状は、褒賞の日取りを知らせるため、康之が家臣に発したもの。「木付之夜打」、「立石表合戦」、「一角手柄」の文字が、松井家臣たちの奮戦ぶりを物語る。

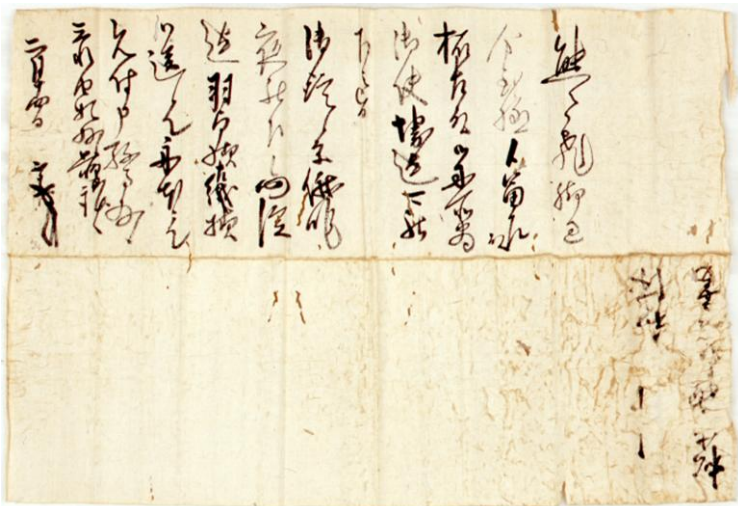
なお、本状は康之の自筆と考えられる。

11 慶長6年(1601)10月 細川忠興知行宛行状 松井康之・興長宛 松井文庫所蔵



関ヶ原合戦の戦後処理の結果、細川家は丹後から豊前・豊後へ国替になる。これにともない、康之は、豊後木付城廻りに約2万6千石の知行地を与えられ、本拠を丹後久美から豊後木付へ移すことになった。本状は、その際、発せられた領地保証書。豊後速見郡のうち6,379石、豊後国東郡のうち1万8,988石あまり、豊前宇佐郡橋津村626石あまり、合計2万5,994石あまりを与える旨が記されている。

12 (天正19・1591年) 2月14日 千利休書状 松井康之宛 松井文庫所蔵



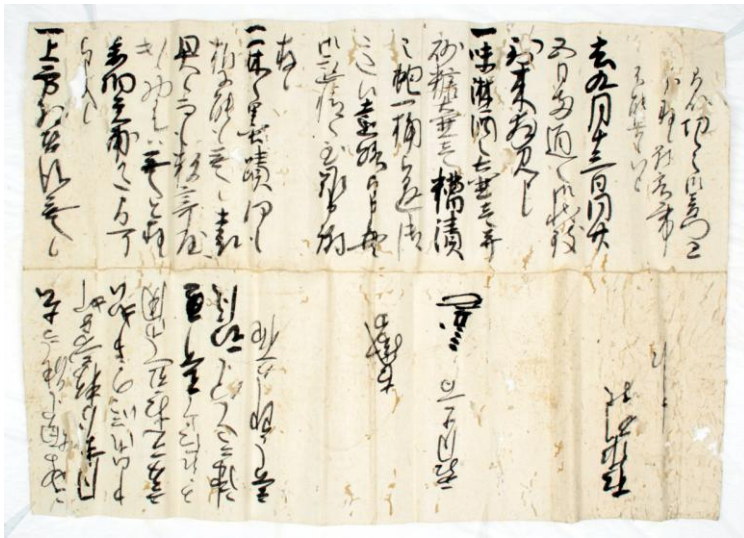
利休（1522～91）の映画で必ず描かれる有名な1シーンがある。豊臣秀吉の逆鱗にふれ、京を追われ、堺に下る利休。天下人の目を恐れ見送る者のない中、弟子の細川忠興と古田織部の二人だけが、淀の船着場でそっと利休を見送るというもの。この場面は、じつに本状がもととなっている。

松井家の家譜によると、当日は康之も見送りに出向く予定であったが、公用のためかなわず、追って飛札を送ったという。本状は、この飛札に対する返書で、忠興と織部を見つけたときの驚きと、二人への謝辞が述べられている。

その後、利休は再び京にもどされ、本状から2週間後の2月28日、聚楽屋敷で自刃した。

その後、利休は再び京にもどされ、本状から2週間後の2月28日、聚楽屋敷で自刃した。

13 (慶長 14・1609) 11 月 12 日 ふるたおひへ古田織部書状 松井康之宛 松井文庫所蔵

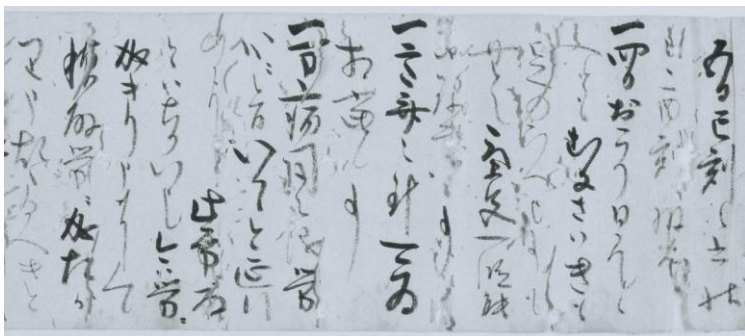


古田織部（1543～1615）は、織田信長・豊臣秀吉に仕えた武将であるが、その名はむしろ茶人として有名。千利休に師事するも、利休とは異なる独自の茶風を拓き、織部焼や織部燈籠にその名をとどめた。

本状は、織部が康之に宛てたもの。土産物（味醂酒、砂糖、粕漬の鮑）に対する礼と、康之から依頼を受けた一休墨蹟の鑑定結果が述べられている。一休墨蹟について織部は、「様子が良くないので、表具をしても茶席に出せる代物ではない」と、自分の見立てを率直に康之に伝えている。

松井家には、この他にも、康之と織部の親交を物語る書状が複数伝来している。

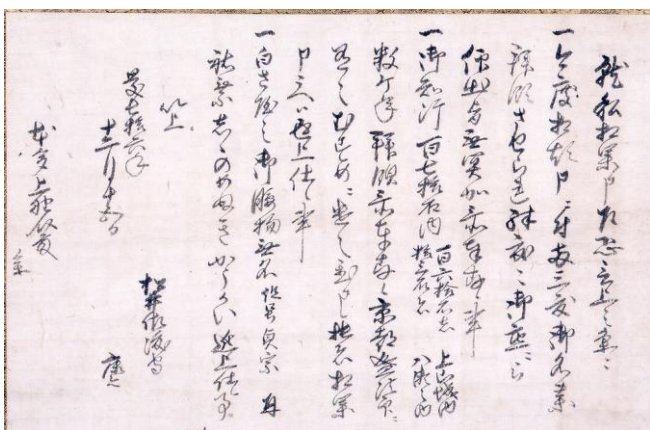
19 (慶長 13・1608 年) 5 月 6 日 細川忠興自筆書状 荒川少兵衛・松井興長宛 松井文庫所蔵



松井康之は、慶長 10 年（1605）から 13 年（1608）にかけて、たびたび病に臥している。その間、細川忠興は毎日のように見舞状を書き送り、康之の容態を尋ねた。本状はそのうちの 1 通で、康之の息子興長と医師荒川少兵衛に宛てたもの。2 m40 cm に及ぶ長い手紙で、しかも自筆。

これほどの長文を自筆で作成するのは、大変だったはずで、忠興が康之のためには労を惜しまなかったことがわかる。ところで、書中には、「まんびょう万病円」なる薬がたびたび登場する。詳細は不明であるが、気力を回復する効果があったようで、忠興は「万病円」を康之に服用させるよう指示している。

20 慶長 16 年（1611）12 月 15 日 松井康之遺書 本多正純宛 松井文庫所蔵



慶長 17 年（1612）1 月 23 日、松井康之は、豊前小倉（現福岡県北九州市）で 63 年の生涯を閉じる。その約 1 ヶ月前、死期が間近であることを悟った康之は、徳川家康に遺書を提出している。本状はその写で、三度にわたって名薬を賜ったことに対する謝辞、山城国内の知行地を返上すること、形見として刀を進上することが記されている。康之が家康から格別の厚情を受けていたことを示す一品である。